ご挨拶

本日は、ようこそお越しくださいました。

今年は、昨年にも増して暑い夏でした。このような夏が今後も続かないことを願いたいものです。コロナ感染症騒ぎが始まって3年半が経ち、この間にすっかり日本人の生活が変化してきてしまっているように感じます。生活を脅かす物価高と増税、どこを向いているのか分からない政治、世界各地で終わらない戦争。マスク着用やワクチン接種が逆効果なのか、3年半の間の超過死亡が45万。調べていくと、どうも得体の知れない大きな力が日本に襲いかかっているようです。このままでは良き日本が失われていくような感じがしてなりません。

演奏会の副題の“日本を取り戻す”は、演奏内容との関連はありませんが、邦楽の古典と現代の名曲をお聴きいただき、音楽の力を借りて、昨今の状況を少しでも良い方向へ向かわせたい、という模索の気持ちを込めております。

この演奏会が、日本の楽器の響きを通して、日本の良さを再認識する機会となり、“日本を取り戻す”手がかりに少しでもなれば幸いです。

プログラム

1 茶湯音頭　菊岡検校作曲

箏　飛田 光江　　仲山 順子
三絃　佐藤 眞理子　尺八　佐藤 祈采

茶の湯の道具や茶室、お茶の産地などを織り込みながら男女の情愛について歌っています。

＜歌詞＞

世の中にすぐれて花は吉野山　紅葉は龍田
茶は宇治の都の辰巳　それよりも廓は都の未申
すきとは誰が名に立てし　濃茶の色の深緑
松の位に比べては、（…手事）
憂さを晴らしの初昔　昔新の爺婆と　なるまで
釜の中冷めず　縁は鎖の末長く　千代萬代へ。

2 惜別の舞　宮田耕八朗作曲

箏　柴田 裕子　　尺八　佐藤 祈采

中国・唐の時代の詩人であり画家でもある王維（おうい）が、砂漠の西の彼方へと旅立つ友との別れを惜しみ詠んだ漢詩を題材にした曲です。

いよいよ旅立ちのときがやってきた。さあ、もう一杯飲みたまえ。関所をでたならば、もういっしょに酒を酌（く）み交わす友もいないのだから。

酒を酌み交わすうち、やがて、どちらともなく惜別の舞を舞い始める。

3 湖月綺譚　神坂真理子作曲

箏Ⅰ　佐藤 眞理子　箏Ⅱ　明妻 薫子
十七絃　柴田 裕子

湖上に浮かぶ月の深い静寂にみちた情景の中、箏の音色にたぐり寄せられるように、物語は秘めやかに紡ぎだされていきます（作曲者、2016年）。

～ 休憩 ～

4 まゆだまのうた　長澤勝俊作曲

箏 佐藤 眞理子　　尺八 佐藤 祈采

「まゆだま」とは、１月１５日の小正月に、山桑やアカメガシワの枝に餅、団子などをたくさんつけ、その年の繭が豊かにできることを願って行う行事です。多くの繊維が化繊に変わりつつある現在、蚕を育て繭をつくり、その繭からの糸を紡ぎ絹を作りだしてゆく作業は、大変まだるいことです。しかし、そこには、我々民族が長年かかって育んできた“美”への叡智がきらりと光っています。

この曲は、いうなれば絹の讃歌であり、またそれをつくりだしてきた人間の讃歌でもあります。

5 春の夜　宮城道雄作曲

箏本手　飛田 光江　　箏替手　仲山 順子
尺八　佐藤 祈采

宮城道雄が二十歳の時に土井晩翠の新体詩に歌と箏の曲を付けたもの。春の華やかさの中に見果てぬ恋の憂いを感じさせる曲です。

＜歌詞＞

あるじはたそや　白梅の、香りにむせぶ春の夜は、朧の月をたよりにて、しのび聞きけん妻琴か。（手事）そのわくらばの　手すさびに、そぞろに酔える人心、かすかにもれし　ともし火に、花の姿は照りしとか。　たをりは　はてじ　花の枝、なれしやどりの鳥なかん、朧の月の　うらみより、その夜くだちぬ春の雨。　（手事）ことはむなしく音をたえて　いまはたしのぶかれひとり　ああその夜半の梅が香を、ああその夜半の月影を。

6 秋によせる三つの幻想曲　長澤勝俊作曲

箏Ⅰ　柴田 裕子　　箏Ⅱ　佐藤 眞理子
十七絃　明妻 薫子　　尺八　佐藤 祈采

日本の美しい四季、特に秋はさまざまな物思いにふける季節であり、音楽の分野でも幾多の名曲が作られています。また秋を表現する美しい言葉も数多くあり、それぞれが含蓄に富んだこまやかな雰囲気をかもし出しています。

急速に失われている自然のなかで、私は日本のこの心だけは常に大切にしたいと念願してきました。

曲は三つの部分より出来ており題名がついていますが、これにこだわる必要はありません。長い伝統を持つ日本の楽器が、それぞれに所を得て生き生きとしたアンサンブルにより、日本の秋をうたいあげることが出来ればと希い作曲したものです。（作曲者）

一、秋霖（しゅうりん）　秋のなが雨
二、野分（のわき）　秋のころ吹く強い風
三、黄落（こうらく）　木の葉または果実の黄ばんで落ちること